

Climate change: a Nobel cause

風向きの変化がもたらした ノーベル平和賞

Nature Vol. 449 (766) / 18 October 2007
Quirin Schiermeier & Jeff Tollefson

ポツダム気候影響研究所（ドイツ）の気候モデル作成者Stefan Rahmstorfは、「まったく予想していませんでした。すばらしいことです」と語った。10月8日から10日にかけて、彼はポツダムで開催された「地球の持続可能性：ノーベル賞受賞者の主張」というシンポジウムに参加していた。シンポジウムには10人以上のノーベル賞受賞者と多数の専門家が参加して、気候変動とそれに関連した諸問題について議論した。そして10月12日に、彼らは映画製作者であり米国前副大統領であるアル・ゴアと国連のIPCC（気候変動に関する政府間パネル）がノーベル平和賞を受賞したことを知ったのだ。彼らの主張そのものがノーベル賞の

受賞理由になったのである。

「アル・ゴアは、気候のために精力的に闘ってきました。政治家や市民の目をこの深刻な問題に向けさせた功績は、十分に受賞に値します」と、ポツダムでのシンポジウムに参加していたIPCC前議長のロバート・ワトソンはいう。「一方、IPCCが共同受賞したことは、信じられないくらいうれしい驚きでした。気候研究コミュニティの努力が正当に報いられたのです」。IPCC現議長のラジェンドラ・パチャウリもまた、今回の受賞により科学者たちの業績が広く認められたと考えている。「科学コミュニティに敬意を表します。この賞を獲得したのは彼らです」と彼は話す。

気候変動が究極的には平和と安全に対する脅威となることを考えれば、IPCCの活動に対してノーベル平和賞が授与されるのは極めて妥当なことである、とワトソンは付け加える。同賞は、以前にも環境分野の活動に対して授与されたことがある。ケニヤの生物学者にして環境保護活動家であるワンガリ・マータイは、アフリカでグリーンベルト運動を立ち上げた功績により2004年のノーベル平和賞を受賞した。ポツダムでのシンポジウムには彼女も参加し、ナイロビからライブビデオによる演説を行った。

IPCCは、過去20年間に4回にわたって評価報告書を発表してきた。いずれも、気候変動の科学と影響に関する既存の科学文献を広範に解説したものであり、数千人の著者や解説者による文献が評価の対象になっている。気候変動の科学に関する最新の評価報告書の筆頭著者であるRahmstorfは、「夜間や週末に山のように積み上げられた文献を吟味していく作業がどんなにたいへんか、想像していただけるでしょうか?」と語る。

最近になって、IPCCが編纂した情報を

政策立案者に注目させ、利用させるためにはどうすればよいか議論されるようになった。パチャウリは、いくつかの方法を提案するメモを起草して配布した。その1つは、具体的な問題に関する簡潔で対象を絞った報告書を頻繁に発表するという方法である。もう1つは、気候変動がそれぞれの地域に及ぼす影響に徐々に注目していくという方法である。これから数か月にわたって開かれる一連の会合の中で、これらの選択肢やその他の選択肢について話し合うことになる。「我々は、IPCCが効率よく機能するように、これを変えていかなければならないのかもしれない」とワトソンはいう。「けれども今回のノーベル賞は、IPCCを存続させなければならないことを改めて自覚させてくれました」。

環境保護活動家や多くの米国人科学者は、世界の人々の目を気候科学に向けさせたゴアの努力を賞賛した。それは20年以上前に始まり、つい最近『不都合な真実』というドキュメンタリー映画を生み出した。気候研究所（ワシントンDC）の気候変動プログラムの主任科学者であるMichael



左は、米国前副大統領のアル・ゴア（59歳）。右は、受賞を祝うIPCC（事務局はジュネーブ）のラジェンドラ・パチャウリ議長（左、67歳）と同僚たち。

MacCrackenは、ゴアは1990年代にビル・クリントン政権の副大統領であったときには米国を動かすことができなかったが、その後、人々にメッセージを伝えるのが本当に上手になったと指摘する。「世間の注目を集めるのは非常にむずかしいことです」と彼はいう。「ゴアの真の功績は、そこにあるのだと思います」。

米国海洋大気局の上級科学者でありIPCCの第一作業部会共同議長であるスーザン・ソロモンは、今回の受賞は「科学がもたらしたすばらしい勝利」であるといい、そのメッセージを市民に届けたゴアの貢献をたたえた。「私はあの映画が好きです。大好きです」と、ソロモンはいう。「彼は、人々に現状を

認識させたいのだと思います。それは非常によい目標です。私は、彼が政策を売り込もうとしているとは思いません」。ハーバード大学の地球化学者であるDan Schragは、ゴアの受賞は妥当であるとしながらも、政治的な面についてはそれほど楽天的ではない。「私が唯一心配しているのは、彼の活動により気候問題に強い関心を寄せる層が生まれたのは米国内だけであり、ほかの国々には当てはまらないということです」。

案の定、今回の受賞を受けてゴアはもう一度大統領選に出馬するのではないかとこの憶測の声があがっている。彼は繰り返しその意思はないといっているが、可能性を完全に否定したこともない。 ■

著作権等の理由により画像を掲載することができません。